

第 32 回 歴史リレー講座「太子道のこと、そして高田良信長老の思い出」 小滝 ちひろ氏 (H29.5.21)

この 4 月 26 日に亡くなられた法隆寺の長老高田良信さんを偲び、取材での思い出話や太子道などについてお話しいたします。高田さんとの出逢いは藤ノ木古墳取材がきっかけでした。そして一昨年秋に始まった長期インタビューでは、その人となりにより深く触れることができました。逝去の公表は家族による葬儀後というのも生前からの願い。さりげないダンディズムを最後まで貫かれた気がしてなりません。

昭和 51 年、高田さんは研究者らとともに初めて法隆寺から橘寺（飛鳥）まで、5 年後には大阪府太子町の叡福寺（磯長）まで歩きました。しかし、太子道と呼ばれるこれら 2 つのルートに関して内心は忸怩たる思いが…。「叡福寺へ続く道は太子道ではない。あれは當麻道だ。龍田大社や信貴山を経て大阪の四天王寺に向かう道が本来の太子道」という考えがどうやら本音だったようです。

近世、聖徳太子は親鸞をはじめとする仏教者や能楽関係者、技術者、商人たちにも信仰されましたが、林羅山など太子を批判する儒学者がいたのも事実です。太子の業績を再検証して復権の動きが活発化したのは 1921（大正 10）年の 1300 年忌。ところが、昭和に入ると戦争の時代を反映してか「和を以て貴しとなす」という思想は重要視されない傾向も出てきました。現代社会においては、揺るぎない太子信仰の一方、太子不在説を唱える人もいます。

ここからは高田さんの少年時代に遡ります。高田さんは 1941（昭和 16）年、東大寺にゆかりの深い家に生まれました。戦後、法隆寺は後継者不足に悩み、前途有望な若い僧を求めることになります。そこで白羽の矢が立ったのが高田少年。12 歳の夏には法隆寺の佐伯良謙住職に弟子入りし、厳しい修行に励みます。そのかたわら古瓦蒐集に精を出す小僧さんの好奇心は古文書や古材へと広がり、成長するにつれて探索範囲は塔頭の蔵や屋根裏にまで及びました。資料を年代別にカード整理したあと古文書と突き合わせると、塔頭ごとの歴史が少しずつ浮かび上がってくる…。さらに昔の僧の位牌を発見すれば、きちんと供養したいという思いにかられるのも当然でしょう。このことが成人してからの法隆寺研究につながります。

その後は過去の僧を法要するための約束事を決めたり、寺の公式行事を整えたりと精力的な活躍を続けます。昭和 50 年代には数多く残る寺宝の調査を開始。通り一遍の作業に終わらず、仏像の台座までひっくり返すという徹底ぶり、伝統行事など無形の文化財にも着目した点が大きな特長です。そして高田さんと調査団の地道な努力が、寺宝を種別にとまとめた『法隆寺昭和資財帳』となって実を結びました。

法隆寺金堂の勢至菩薩像は明治時代に盗難に遭い、長らく行方不明になっていました。1990（平成 2 年）にこの仏像をフランスの美術館で発見したのが仏教通の研究者ベルナール・フランク氏です。高田さんは仏像の帰国実現のため彼に協力を要請し、4 年後には一時的な里帰りが叶いました。晩年においては百済観音像堂の建立に精魂を傾け、その落慶法要後は管主を退き長老に就任。以降は法隆寺や聖徳太子についてもっと知りたいとの声に応え、市民向けの講義を続けました。

高田さんとの交流を振り返るとき特に印象深いものが 2 つあります。藤ノ木古墳発見の際、高田さんは「被葬者は崇峻天皇」説を唱えました。しかし「柩の遺骨や遺品を直に目にすることは僧侶として許されることだったのか…」と迷いの言葉も残しています。それを聞いたとき、私は一僧侶としての深い苦悩を垣間見た気がしました。もうひとつは茶目っ気たっぷりの逸話です。平成 6 年、法隆寺の収蔵庫にある焼損壁画の公開が実施されました。見学者は全国から抽選で募るということで、高田さんも試しに応募したものの見事に落選。「これ厳正な抽選が行われた証拠ですよ」と私に落選ハガキを見せてくださったものです。

生前に書き残したメッセージには「幸せな生涯だった。葬儀に関しては人々に迷惑をかけないことを最優先にしてほしい。あの世とやらでは多くの先人たちのお話をうかがいたい」といった主旨の言葉が綴られていました。今頃はあの世で、真っ先に聖徳太子を捉まえて質問攻めにされていることでしょうか。

歴史リレー講座「大和の古都はじめ」第32回

【太子道のこと、そして高田良信長老の思い出】

2017年5月21日

朝日新聞編集委員 小滝ちひろ

◆太子道とは？

- ・法隆寺の「太子道をたずねる集い」のルートは飛鳥、磯長の2ルート
- ・高田長老の思う太子道

法隆寺から叡福寺に行くのは太子道とはいわない。當麻道です。勝手に結ばせてもらったけれど、あれは太子道かどうか。龍田大社や信貴山を経て四天王寺へ行く道が太子道だと思う。いまのルートで固定せず、枝葉を出していただいて、四天王寺までは意味があると思うし。案外まだまだ道があって、當麻道は言われたことがある。広陵町が江戸時代の領地だった。そこへ訪ねて行って交流しようとしたら、喜んでくれて。その後「うちから法隆寺さんへ行くのも太子道です」と言われた。當麻道も何本もあると思う。広陵町を通るのも、王寺を通るのも。字を書けと言われて、石碑ができましたが、本来の太子道は違うのではないかというのが私の思いです。

◆太子信仰とは？

- ・時代によって変わる聖徳太子像 →江戸、明治・大正、昭和戦前、戦後
「和を以て貴しとなす」とは？
- ・厩戸王、厩戸皇子、聖徳太子……呼称さえ定まらない今

◆さて、高田良信さんはどんな人だったのか？

- ・資料の虫はどうして生まれたか
- ・元々は東大寺の人？
- ・12歳で法隆寺、佐伯良謙住職に弟子入り
- ・古瓦、古材、古文書……蔵や屋根裏探検から発見
- ・高校受験に失敗 →師匠からの言葉「人間、一生勉強や」
- ・寺僧の位牌を調べ出す。そして墓碑銘 →供養と思って、が研究に発展
- ・カード式整理、手書き →コンピューターのない時代に
- ・大野可圓師は106世住職、杣田秀山師は107世住職、高田さんは128世住職？

太子道を往く

法隆寺長老 高田 良信

① 飛鳥から斑鳩への太子道

○ 太子道とは

「或書に云ふ、太子鵄宮より毎日橘京の推古天皇の宮に詣らしめ給ふ。其の道、近らしめんがため須知迦部路を作り給ふ。又、其の日中の供御をば屏風で進めしむ。屏風を立てるに依りて当時、寺を立て屏風寺と名づく。」（聖徳太子伝暦）

○ 老翁と太子の出会い

「龍田新宮は太子生年十六歳丁未歳（五八七・物部守屋を討伐）。或廿二癸丑（五九三・太子を摂政とする）。太子橘京より平群の郡に至り椎坂において老翁に遇い給う。老翁問いて云く、「誰人や、何所より来り給うや。」答えて云く、「我れは厩戸なり、都城より来る、堂塔建立のためなり。」翁の云く、「此れより東（斑鳩より西の地域）に斑鳩郷あり、尤も勝美に足れり、彼の所に行きて伽藍を建て給うべし。」仍って太子を導いて斑鳩の山中に入る。翁の云く、「此の所は佛法久しく止住し、伽藍建立に便あり。」爰に太子問いて云く、「翁は誰人や。」答えて云く、「竜田山（竜田老神）の下に住し、秋の木末を愛し、千余歳を過ぐ」太子宣べたもう「已に平群の郡主たり。我が寺（法隆寺）を守護（守護神）したまえ。」（太子伝私記）

○ 昭和五十一年十二月五日に、はじめて法隆寺から飛鳥に至る「太子道」を歩く。

② 斑鳩から磯長への太子道

○ 太子薨去の地

「次に当上宮王院辰巳（南東）の方に八、九町の分斎（場所）に行きて、木瓦葺の堂有り。幸屋と名ずく。昔太子居住の宮なり。葦垣宮と名ずく。此宮に於て御入滅也。此宮より科長に御葬送也。」（諸説あり）（太子伝私記）

「飽波葦垣宮」

「宜く勝地を撰び、造寺の願を遂げんと、是より上宮王飽波の村に仮宮を造り、此宮の四方を葦垣を以て造る故に葦垣宮と云うと、是れ太子薨御の地なり」（鵄三宝起源・万延元年・一八六一）

○ 太子葬送の道

「葬送之儀は乗輿同じ。陪侍の人は各香花をささげ、釋衆は（僧侶たちは）

唄（聲明）を讃ず。斑鳩宮より墓處に至る道の左右には百姓、牆の如くにして各香花をささぐ。或いは聲を失い大いに吠く。或いは佛歌韻を連ねる。官告（官庁からの指令）を待たずして、素服（喪服）、皆着ける。」（太子伝私記）

○ 昭和五十六年四月五日に、はじめて法隆寺から磯長に至る「太子道」を歩く。

○ 太子道と旗尾池・分川池

「（元禄十年・一六九七・十二月廿八日）葛下郡分川旗尾両池掛りより寄進手水鉢井びに家形落成之旨届出る」（法隆寺年会日次記）

③ 太子信仰の今と昔

○ 太子関係寺院の太子信仰

（四天王寺）

「極樂浄土の東門は、難波の海にぞむかへたる、転法輪所の西門に、念仏する人まいれとて」（梁塵秘抄）

（法隆寺）

「法隆寺は靈閣薨を接え、宝物蔵に満つ。遺身の舍利、梵網の首題、渴仰は眼に在り。感涙は袂を湿す」（聖徳太子讃嘆式）

（叡福寺）

「科長の御廟・巖嶺に近づく者は、聖棺を拝して弥陀三尊の位を知り、庭砂に跪く者は靈木を見て大乘四衆の理を信ず。」（聖徳太子讃嘆式）

（浄土真宗）

「浄土真宗開祖の親鸞が太子を「和国の教主」と讃えて三種類の『太子和讃』を作っている。それは親鸞が京の六角堂や磯長の太子廟での夢告によつて太子に導かれたことに由来する。親鸞の太子の敬慕によつて真宗寺院の本堂には浄土教相承七高祖（親鸞が浄土真宗相承の祖師と定めた七人の高僧）とともに太子孝養画像（十六歳）を懸けることとなり、その遺徳を大いに奉賛したことが、太子信仰が全国的に広まる大きな要因となった。」

○ 能楽関係者たちの太子信仰

「上宮太子、末代のため神楽なりしを「神」といふ文字の偏を除けて旁を残し給ふ。これ、日よみの申なるが故に、申楽と名附く。即ち楽を申すによりてなり。また神楽を分くればなり。かの（泰）河勝・欽明・敏達・用明・崇峻・推古・上宮太子に仕へ奉り、この藝をば子孫に伝え」（

（風姿花伝・世阿弥の著・能楽書）

○上宮にある能楽発祥伝承

「猿樂延年の舞として往古より法隆寺に伝て大会等の後日に必ず舞うなり。何れより濫觴すと云うことを知らず。伝えて云う、当初聖徳王葦垣宮において諸神を祀り三日三夜神楽を奏せしめたまひ、其の流を伝える也と。又、秘伝抄に云く、いま宮地の在名の宇神屋と云うは此れ謂なり。舞台の址、今猶存せりと云々」

(鵜三宝起源)

○技能者たちの太子信仰と太子講

「修南院、額に東林寺と在り、又、釜の銘に珠南院と記す(中略)。法隆寺に止住する工匠一味、共に同じて(文明七年・一四七五)建立するなり。是れ太子の広恩に報じ奉らんがためなり。」(工匠・木挽など)(斑鳩古事便覧)

○商人たちの太子信仰

「奉寄進・大和國法隆寺・聖霊院御殿皇太子様御寶前打敷・天下泰平・國家安穩・病災皆除・五穀成就・万民豊楽・海陸安全・商売繁昌・子孫長久・為先祖代々六親眷属有縁無縁三界萬靈佛果菩提也。」

安政六歳(一八五九)二月二十二日榮願主羽州(山形)村山郡山形四日町・吉野屋吉兵衛六十歳」(聖霊院打敷銘)

④太子批判

『林羅山』(近世の儒学の基礎を築いた学者)

「(馬子)崇峻を弑す。太子何ぞ馬を覺して賊(馬子)を討たざるや。太子は宗室(皇室)なり。已に守屋の悪を揚げて稻城の役(物部守屋との戦い)を榮す。守屋未だ嘗て君(天皇)を弑せざるなり。其の悪、其の罪何くにかある」

『中井履軒』(大阪の町人学者)

「弑逆王子の建てられし寺などは、是を拝みなば、わが身に汚れのつくべきことにこそ」

「抑も我法隆寺に於て今より三十六・七年前、安政、万延年中の頃、破仏家平田篤胤風の国学大に流行す。我本寺若輩の僧等も之れを学ぶ。彼の破仏之説を深く信じ仏法は浅間敷者と思ひ誤り、甚歎に至ては我等坊主になりしは自分の本心より出しに非ず、父母師匠に誘はれ父母の進めにより坊主に成しなり。今想へは國家の罪人、今父母の誤りを速に帰俗して之を謝罪せんと、遂に退寺離散す」(参考の演説)

○渋沢栄一(明治大正期の大実業家)に黑板勝美(東京帝国大学教授・国史学者)と正木直彦(明治昭和期の美術行政官・教育家)が聖徳太子一千三百年忌に協力をしたときの逸話。

「(黑板と正木の二人が)幸に(渋沢に)面会するを得、種々来意を陳ぶ。然る處、あに図らんや、予は水戸学派(水戸藩で研鑽された学派で国学、史学、神道を中心とした思想)の徒なり聖徳太子は嫌いなり、と一言に自己の所信を述べ拒絶せらる。茲に於て黑板先生は国史の上より太子の偉大なる聖徳を熱心に説示せらる。流石賢明なる男はかく然として感動し始めて太子の眞面目を自覚し大に發明しました。永々の誤解を訂正いたします。応分のお力を尽くしましょう」(大正十年一千三百年遠忌準備記事)

『大正十年ごろの某紙の投書欄』

「聖徳太子のために大法要をやると云うのはけしからぬ。あんな大義名分をみだした人の為になるをやるのか」

⑤太子の復権

「太子は推古天皇の摂政として内政では十七條憲法を制定し、外交では隋と対等の交流をした。かの大化改新も太子の影響を受けたものといっても過言ではない。太子は神祇を尊び、儒学を奨励し、仏法を興隆した」

(聖徳太子一千三百年御忌奉賛会趣意書・要旨)

「本会(聖徳太子一千三百年御忌奉賛会)が法隆寺会と称したところから十二年、専ら徳川時代の誤った太子観(太子を批判)を打破することにつとめ、世人の誤解を解消しつつ太子の偉大な事業を、細かいところまで説き示して太子へ深い真心を呼び起こしたことは多くの本会の功績の中でも、財団設立の大事業と共に、最も大なるものの一つである」

(聖徳太子一千三百年御忌奉賛会小史・要旨)

「たまたま大正十年(一九二一)は太子の一千三百年御忌を迎えたので、法隆寺・叡福寺などで法要が営まれ、それを後援するために著名のる学者・財界人などによって組織せられた御忌奉賛会は、のちに財団法人聖徳太子奉賛会に発展し、太子遺徳の宣揚と事績の研究とを進めた。こうして明治の中葉から昭和の大戦に至るまでは、太子は従来の仏家専有の崇拜の対象からはなれ、冠位を定め、憲法を制し、隋との対等国交を開いた偉大な哲人政治家としての面から景慕せられる人格となった」

(坂本太郎著『聖徳太子』昭和五十四年・吉川弘文館)

⑥変貌しつつ歩み続ける太子観

世界文化遺産登録3周年記念
法隆寺・世界文化遺産への道

期間 平成8年12月11日～12月13日

日 程

第1日	12月11日(水)		
	午前 8時00分	夢殿本尊開扉	[夢 殿]
	10時00分	世界文化遺産記念碑除幕式	[中 門 前]
	午後 1時00分	法隆寺フォーラム 講演「世界史の中の法隆寺」 平山郁夫氏(日本画家・日本育英会会長)	[聖徳会館]
	2時00分	「法隆寺文化のひろがり」	
第2日	12月12日(木)		
	午前10時00分	太子道サミット「飛鳥・斑鳩・磯長」	[聖徳会館]
	午後 1時00分	「世界文化遺産登録3周年を迎えて」 高田 良信(法隆寺管長)	[聖徳会館]
	1時30分	記念講演「聖徳太子と法隆寺」 梅原 猛氏(国際日本文化センター顧問)	
第3日	12月13日(金)		
	午前10時30分	世界平和祈願ならびに 夢違観音(模造)開眼法要	[大 講 堂]
	午後 1時00分	宗次郎・立松和平の古代へのしらべ	[中 門 前]
	2時30分	記念講演「世界平和と文化遺産」 立松和平氏(作家)	[聖徳会館]
	4時00分	夢殿本尊閉扉	[夢 殿]

平成8年12月11日～12月13日の3日間 午前8時30分～午後4時
*若草伽藍特別公開(無料) *金堂内部ライトアップ
*夢殿本尊開扉及びライトアップ *上御堂公開

太子道サミット次第

— 飛鳥・斑鳩・磯長 —

12月12日(木)	9:00	受付
	10:00	太子道サミット開会 主催者挨拶 ご来賓挨拶 天根 俊治氏(奈良県教育長) 「飛鳥・斑鳩・磯長をむすぶ」 【パネラー】 関 義清 氏(明日香村村長) 安曾田 豊 氏(橿原市 市長) 森 晃一 氏(田原本町町長) 森田 忠 氏(三宅町 町長) 上田 直朗 氏(川西町 町長) 島田 悠紀夫 氏(安堵町 町長) 小城 利重 氏(斑鳩町 町長) 植田 忠行 氏(王寺町 町長) 先山 昭夫 氏(香芝市 市長) 吉村 久平 氏(太子町 町長) 高内 良正 師(橘 寺 住職) 近藤 本龍 師(叡福寺 住職) 高田 良信 (法隆寺 管長) 〔順不同〕 【コーディネーター】 立松 和平氏(作家)
	12:00	閉会の辞

※なお、ひきつづき午後より梅原 猛氏の記念講演があります。

丸亀市・坂出市・善通寺市・綾歌町・綾上町・宇多津町・国分寺町・飯山町・綾南町・大内町・
白鳥町・引田町・三木町・牟礼町・庵治町・琴南町・琴平町・多度津町・仲南町・満濃町・
三野町・詫間町・仁尾町・高瀬町・山本町・財田町・豊中町・松山市・新居浜市・西条市・
北条市・伊予市・久万町・小田町・柳谷村・美川村・面河村・砥部町・広田村・中山町・
双海町・重信町・川内町・松前町・中島町・阿波町・南国市・筑紫野市・春日市・宇佐市
奈良国立博物館・奈良国立文化財研究所・群馬県立歴史博物館・兵庫県立歴史博物館・
奈良県立橿原考古学研究所・愛媛県歴史文化博物館・大分県立宇佐風土記の丘歴史民族資料館・
泉佐野市立歴史館いずみさの・伊丹市立博物館・香芝市立二上山博物館

【関係寺社】
橘寺・叡福寺・斑鳩寺・中宮寺・法輪寺・龍田本宮・龍田新宮

〔順不同〕

太子道サミット

—飛鳥・斑鳩・磯長—

会議録



【パネラー】

関安曾田	義晃	清一	氏	(明氏)	日香	村市	市長
森田	晃	豊一	氏	(檀氏)	原本	町町	長
上田	直	忠朗	氏	(三氏)	宅町	町町	長
中川	喜久	二重	氏	(川氏)	西町	町町	長
小城	利忠	行信	氏	(安氏)	堵町	町町	長
植野	博久	平正	氏	(斑氏)	鳩町	町町	長
石村	久良	龍信	氏	(王氏)	寺町	町町	長
吉内	本良		氏	(二氏)	上山	博物館	館長
高藤	田		氏	(太子)	町町	町町	長
			師	(橘)	寺住	職	
			師	(叡)	福寺	住職	
			師	(法)	隆寺	管長	

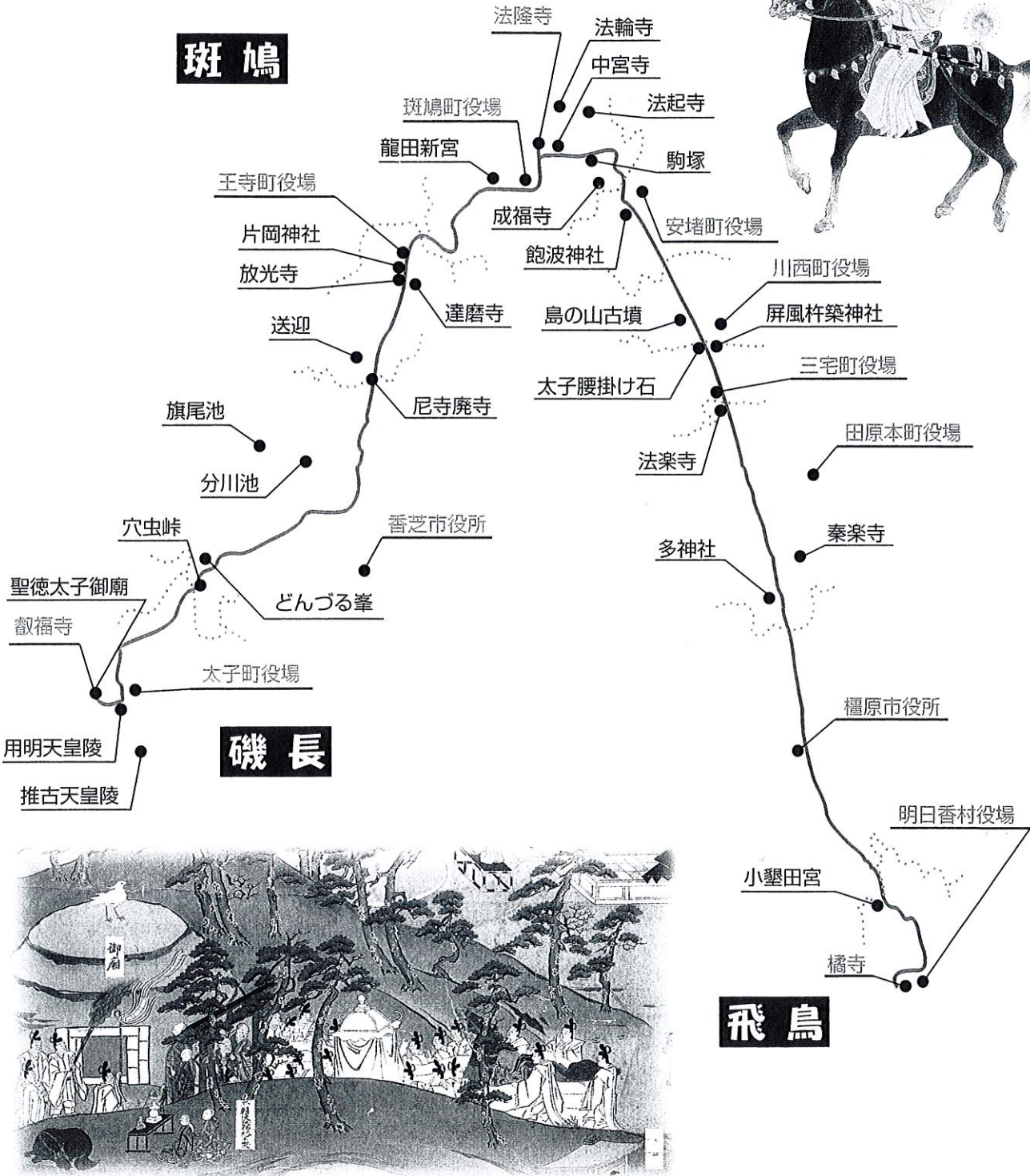
[順不同]

【コーディネーター】

立松和平氏(作家)

太子道

— 飛鳥・斑鳩・磯長をむすぶ —

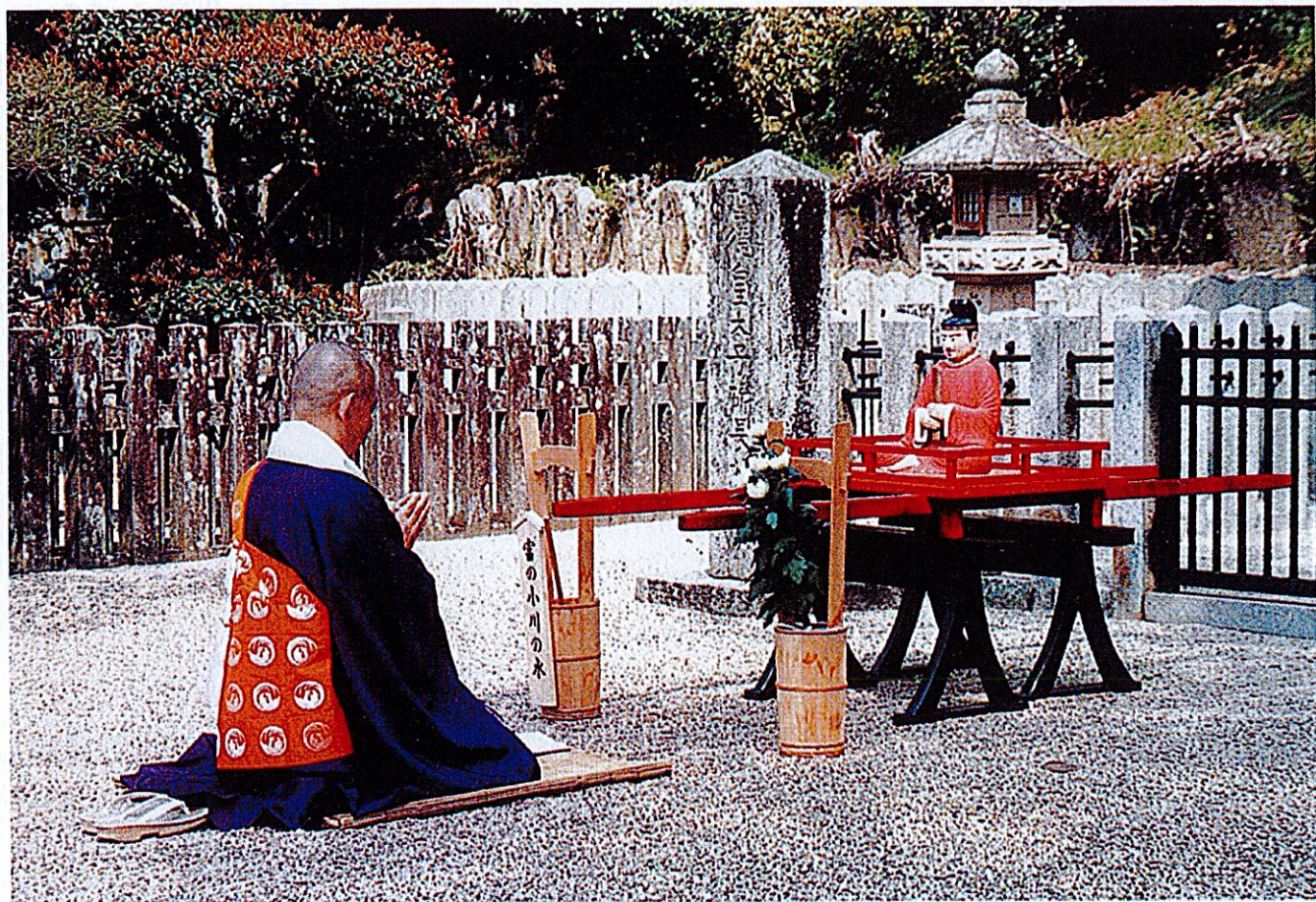




科長の太子御廟にある大乘木(楠樹)



法隆寺の聖霊院前にある大乘木(楠樹)



科長叡福寺の聖徳太子御廟を参拝する筆者（平成七年）

（高田良信『聖徳太子湯仰』小学館スクウェア、2001年）



（法隆寺編『太子道－飛鳥・斑鳩・磯長－』法隆寺、1997年）